

イチゴのナミハダニに対する有効薬剤

～ 効果が期待できる農薬は極めて少ない！ ～

1. はじめに

ナミハダニは薬剤抵抗性が発達し、イチゴ栽培では防除困難な重要害虫となっている。そこで、イチゴのナミハダニの防除対策に役立てるため、主産地である那賀地域のナミハダニに対する主要5農薬の殺ダニ効果を調査した。

2. 試験方法

供試農薬は図1に示したとおりで、希釈倍数はイチゴにおける実用濃度とした。2018年5月に那賀地域の6か所のイチゴ栽培ほ場からナミハダニを採集した(表1)。採集当日または翌日に以下の検定を行った。直径9cmのプラスチックシャーレに約5cm四方に切ったキッチンペーパーを敷き、水道水で十分に湿らせた。この上にインゲンマメの初生葉を葉表を上に向けて乗せ、供試ナミハダニの逃亡防止のため、水道水を含ませたキッチンペーパーの小片で約3cm四方の区画を作成した。この区画内にナミハダニ雌成虫を約20～25頭、面相筆を用いて放飼した。雌成虫が定着してから、供試農薬を水道水で希釈し、エアブラシを用いて約3.4mg/cm² 散布した。散布後のシャーレは25℃、16時間日長で保持し、2日後に生死を判定した。生存していても歩行しないものは死亡に含めた。1農薬につき3反復行った。対照として水道水を散布して同様に生死を調べ、Abbottの補正式により補正死亡率を算出した。殺ダニ効果は補正死亡率で判断し、95%以上で

高い、85以上95%未満で認められる、70%以上85%未満で程度はやや低いと認められる、70%未満で低い、とした。

3. 結果

結果を図1に示した。①マイトコーネフロアブルはすべての個体群に対して、補正死亡率が100%で殺ダニ効果が高かった。②コロマイト水和剤はすべての個体群に対して、補正死亡率が14～68%で殺ダニ効果が低かった。③スターマイトフロアブルとダニサラバフロアブルは、貴志川B個体群に対して殺ダニ効果が高かったが、その他の5個体群に対しては効果が低かった。④ダブルフェースフロアブルは、貴志川A個体群と貴志川B個体群に対して殺ダニ効果が高かったが、その他の4個体群に対しては効果が低かった。

4. おわりに

今回供試した6か所の個体群のうち、4か所の個体群は効果が高い農薬が1種類だけであった。このことから、那賀地域の多くのイチゴ栽培ほ場では、防除効果が期待できる農薬が極めて少ないと考えられる。化学農薬に依存した防除対策を見直し、天敵カブリダニ類の利用を中心としたIPM(総合的病害虫管理)に取り組んでいただきたい。

(環境部 井口雅裕)

表1 供試ナミハダニ

供試個体群	採集場所
打田A	紀の川市(打田地区)
打田B	紀の川市(打田地区)
貴志川A	紀の川市(貴志川地区)
貴志川B	紀の川市(貴志川地区)
粉河	紀の川市(粉河地区)
岩出	岩出市

採集協力: 那賀振興局農業水産振興課

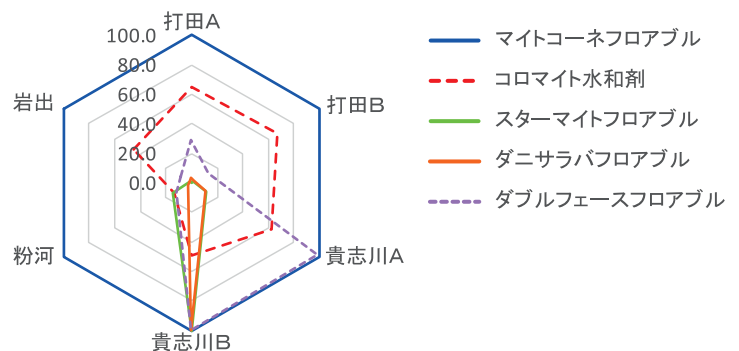


図1 ナミハダニ雌成虫の補正死亡率(%)